

vivo

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ] vol.260

12-1

December 2023 & January 2024

クリスチャン・ツィメルマン
との一期一会

特集

02



©Bartek Barczyk

- 02 クリスチャン・ツィメルマン ピアノ・リサイタル
- 04 クリスマス・プレゼント・コンサート 2023
- 06 ちょっとお昼にクラシック 高橋敦・呉信一・竹島悟史 インタビュー
- 08 INFORMATION

水戸芸術館
ART TOWER MITO

時が満ち、機が熟して

——クリスチャン・ツィメルマンとの一期一会

文：青澤隆明（音楽評論家）



シマノフスキのアルバムを聴きはじめて、そのやさしさにたちまち惹き込まれた。歳月や感情の地層の奥深くから、雪解けを待って湧き出てきたような清らかな悲しみと慈しみがそこにあった。神秘的という感覚よりは、ずっと自然で、その意味でとても人間的な響きがあった。

クリスチャン・ツィメルマンの新しいアルバムで、作曲家の140周年を祝うように昨年秋にリリースされたレコーディングである。シマノフスキ初期のプレリウドがまず、ツィメルマンのピアノの透明な音で、ていねいに紡がれていくのだった。そこで打ち震えている繊細な詩情のなかで、忍耐と孤独と優しさと微笑みは紙一重だ。

本作はちょうどこの10月、英国の名門誌『Gramophone』が選ぶ2023年のレコーディング・アワードのピアノ部門を受賞したことで改めて話題を呼んだ。日本にも縁深いツィメルマンらしく、新録音は2022年にふくやま芸術文化ホール リーデンローズで収録されたが、そこは彼が信頼する豊田泰久が音響設計を手がけたホールである。

プレリウド 作品1とマズルカ 作品

50からの抜粋と、ポーランドの民謡の主題による変奏曲 作品10が広島同ホールで新しく録音されたが、もうひとつそこに〈マスク(仮面劇)〉作品34が組み合わされており、こちらは1994年5月にコペンハーゲンで録音されたものだ。ツィメルマンのシマノフスキの音楽への取り組みには、両録音の間だけでもすでに28年もの歳月が経過していたことになる。多くの作品を渉猟しつつ、実際にコンサートやレコーディングに臨むレパートリーには極めて慎重なスタンスをとってきたツィメルマンだが、祖国ポーランドの誇る大切な作曲家の音楽はこの長い年月、ずっと心の内であたためられてきたに違いない。

いずれにしても、新しいレコーディング作品が、こうして日本との関わりも深く結実したのは喜ばしいことだ。この新譜を締めくくる〈ポーランド民謡の主題による変奏曲〉作品10は、今季のリサイタルの掉尾を堂々と飾る曲として、秋からのツアーで採り上げられている。11月初旬から12月中旬にかけての日本ツアーのプログラムは、ドイツでの演奏会からほどなく、10月初めに発表されたば

かりだ。ショパンの夜想曲4曲とソナタ第2番 変ロ短調が前半、後半はドビュッシーの《版画》と、シマノフスキの作品10を組むユニークな構成である。

ショパンの夜想曲は、変ホ長調 作品9の2、嬰へ長調 作品15の2、第16番 変ホ長調 作品55の2、第18番 ホ長調 作品62の2と、いずれも長調をとる第2曲が選ばれている。最初に出版された〈3つの夜想曲〉作品9は、1830年11月にワルシャワを逃れて、ウィーンを経てパリに到着する前後に書かれた。そこから作品62の2で作曲家の最晩年へと歩み、葬送行進曲を据えた第2ソナタ 作品35を経て、演奏会後半では半世紀ほど飛んで、ドビュッシー、シマノフスキとともに20世紀の初めへと踏み込む。シマノフスキの変奏曲 作品10はワルシャワ時代の初期作で1904年の作曲、つまり1903年に完成したドビュッシーの《版画》とはまさしく同時代の創作にあたる。

かくして、激動の祖国を離れたショパンの魂は、その後のパリを生きたドビュッシーをみて、一世紀ほど後のシマノフスキの意気を通じてワルシャワに帰還することになるのだろう。しかも、それは若きシマノフスキにとって理想化されたポーランドの精神である。母国を深く愛するツィメルマンのまなざしが感じられてくるようにも思える。プログラム全体として、曲のかたちだけみても、性格小品ではじまり、ソナタ、個々に標題をもつ組曲、変奏曲という、実に多様な変化に富む旅となっている。

なにごとにもしっかりと慎重なツィメルマンは、「プログラムの決定をできるだけ遅らせたい」と語ってきた。つまり、まさに演奏会のそのとき、もっとも自分が演奏したい作品を聴衆と分かち合うのが、両者にとって最善であるはずだと言

うのである。「レパートリーは渴望のようなものだから、その時点において自分が正直に演奏したいと欲する曲目で構成したいのです。聴衆に対して、この人間はステージでほんとうに弾きたい曲を演奏するのだという誠実さを確保するために。事前に決まった作品を演奏して、その曲を好きであるふりをするよりはるかにいい」とは、もう15年前に彼が語っていたことだ。

ヨーロッパ・ツアーもはじまり、おそろく手こたえをつかんだ時点で発表されたこのプログラムは、3か月ほどにわたるツアーのなかで、演奏のたびにさらに磨き抜かれ、ツィメルマン自身の愛着、理解と表現を温めながら、その信を新鮮に保ち続けることだろう。その日ごとに、会場ごとに変化しつつ、さらなる発見を聴き手と分かち合うようにして――。

さて、水戸芸術館でのツィメルマンのリサイタルは、これが4度目の機会となる。ハイドン、ブラームス、シューベルトを弾いて1997年に初登場。それからかなり歳月が開いて、2016年1月にシューベルトの初期の変奏曲と最後の2つのソナタを演奏した。さらに6年近くがめぐって、2021年11月に「希望の音楽」と題されたシリーズの筆頭で登場し、バッハのバルティータ第1番と第2番、ブラームス後期の間奏曲 作品117、ショパンのソナタ第3番 ロ短調 作品58を弾いた。前々回と前回のリサイタルを私も聴いたが、水戸芸術館の音響的にも雰囲気的にも親密な空間のなかで、細部にいたる透徹した構築だけでなく、ツィメルマンの人間的な温かさや感情の機微も滲むように伝わってきて、忘れ難い演奏会となった。

ここまで水戸芸術館で重ねてきた演奏に関しては、ツィメルマン自身も克明な記憶と感触をもっているに違いない。同一プログラムで各地をツアーするが、彼にとってそれは宿を転々とするような

くり返しでは決してなく、それぞれが一期一会のかけがえない時間なのである。というのも、ツィメルマンは楽譜の細部だけでなく、ホールや音響の特徴についても精細な記憶をもって、自身の演奏表現を細心に伝えることを鋭敏に意識しているからだ。

そもそも細かなことを気づかう神経をもたない人に、ピアノをすみずみまで上手に扱うことなどできない。楽譜に書かれたすべての音に精細に神経を注ぐだけでもたいへんなことだが、それを端正な響きにしていくのは、それこそ膨大な作業である。「作業」という言葉は少しも芸術的でないと思われるかもしれないが、実際にはそうした現実的な処理と手続きを飛ばして、物事をなし得ることはしない。ツィメルマンは自身の演奏の音響設計に最大限責任をもとうと努めるのである。楽器の調律はもちろん、製作に近いところまで、その機構を知り抜くことが、そうした精緻な設計と達成には不可欠である、と考えているのだろう。

そんなところまで神経を使っていられない、他にもやるべきことが無数にあるのだから……と言うのがふつうのピアニストだとしたら、ツィメルマンはその域をとうに超えている。すべてをコントロールすることは人間にはできないが、それでも自分に可能なかぎり、最大限の責任を果たそうとする姿勢は、その緻密さと精確性の希求とあわせて、まさしくエンジニアの精神とみられるだろう。聴取の環境要件も、そこには自ずと含まれてくる。私たち個人やそのときどきの感情、天候や湿度などは他者の領分だとしても、ホールと楽器、自身のコンディションについては彼のコントロール領域でもある。演奏表現の徹底した磨き上げやコントロールは、そうして音響環境の精妙なバランス統制という範囲に拡張されているのだ。

しかし、ツィメルマンがそうして楽器

やホールや音響特性についても科学的な研究に執心してきたのはある意味、演奏における物理的な変化の要件をすべて意識から追いやるためだったのではないか。できるかぎり直截に作品の姿を響きで実現し、夾雑物や雑念なく率直に、ひとりひとりの聴き手に明確に伝えることを、彼は演奏家の使命としているのだと思える。

いつからこうした方向に大きく動き出したのか私は知らないが、演奏における完璧主義を追求すれば、必然的にその環境条件の影響を無視できなくなる、という方向にツィメルマンの神経は張り巡らされてきたのだろう。彼自身の演奏にみられる徹底した繊細さを、そうした領分の拡大と掛け合わせるとそれこそ途方もない時間が調査研究と実践探求に費やされるはずで、それがレパートリーを探索しプログラムを熟考する慎重な足どりにも繋がってくる。そうして、ツィメルマンはあらゆる意味で外部から身を護りながら、つまり彼自身の目指す芸術を護りながら、半世紀ほどにもなる年月を第一線で生き延びてきた。

その彼の最新の成果と進境が、この12月、2年ぶりの水戸芸術館での再会で近く明かされる。クリスチャン・ツィメルマンがそのとき愛する作品を、できるだけ誠実に、親密に、徹底して磨きぬいたかたちで聴けるのは、またひとつ、かけがえない音楽体験となるだろう。

■公演情報

クリスチャン・ツィメルマン ピアノ・リサイタル

2023.12.6(水) 19:00

全席指定 A席 ¥10,000、B席 ¥8,000

●曲目

ショパン：夜想曲 第2番 変ホ長調 作品9の2
夜想曲 第5番 嬰ヘ長調 作品15の2
夜想曲 第16番 変ホ長調 作品55の2
夜想曲 第18番 ホ長調 作品62の2

ショパン：ピアノ・ソナタ第2番
変ロ短調 作品35（葬送）

ドビュッシー：版画

シマノフスキ：ポーランド民謡の主題による
変奏曲 作品10

クリスマス・プレゼント・コンサート2023 1年の締めくくりに贈る、音楽のプレゼント

文：鴻巣俊博

水戸出身の作曲家・池辺晋一郎さんの企画・おはなしでお贈りする毎年恒例の「クリスマス・プレゼント・コンサート」。2023年の締めくくりに、バラエティ豊かな4つのステージをお届けします。

爽やかな女声合唱でミサ曲を

今年の「クリスマス・プレゼント・コンサート」は茨城キリスト教学園の中学校高等学校コーラス部の演奏で幕開けです。朝は讃美歌を歌う礼拝から始まるというこの学園は、今年創立75周年を迎えました。コーラス部の活躍は近年目覚ましく、昨年度中学校は全日本合唱コンクール全国大会で金賞受賞、高校は関東ヴォーカルコンテストで金賞受賞を果たしています。今回彼女たちが披露してくれるのは、ルーマニア生まれで現在はハンガリーに居を構えるジェルジュ・オルバーン(1947-)が2000年に発表した〈ミサ曲 第6番〉からの3曲。

「ミサ曲」というと、荘厳で重厚な音楽を思い浮かべる方も多いと思いますが、オルバーンのミサ曲はその想像とは一線を画す、とても軽やかで爽やかな作品です。ゆったりとした波を思わせるピアノにのって、2つのパートが繊細な掛け合いをみせる“キリエ”、心弾む曲調で神の栄光を称える“グローリア”、4つのパートが同じ旋律を1拍ずつずらして歌うカノンがまるで水面に落ちた水滴が作り出す波紋のような広がりを思わせる“サンクトゥス―ベネディクトゥス”——3曲とも心にスッと入ってくる心地よい響きに満ちていますが、演奏の難易度はとても高い作品です。1つ1つの演奏会を大切に、日々練習を重ねるフレッシュなコーラスがホールに爽やかな風を吹かせます。



高木綾子

ロマンティックで情熱的! フルートの魅力

次は、数々のコンクールで優勝・入賞を重ね、日本を代表するフルーティストの1人として第一線で活躍する高木綾子さんのステージ。「クリスマス・プレゼント・コンサート」には2013年にご出演、2021年10月の水戸室内管弦楽団第108回定期演奏会(指揮:広上淳一)にはゲスト奏者としてご出演いただきました。流麗なソロと豊かな音色がご記憶にある方もいらっしゃるのではないでしょうか。

美しくて優しくエレガント——そんな形容詞で語られがちなフルートですが、高木さんは「木管楽器の中で一番呼吸困難になりやすい楽器」だといいます。他の楽器はマウスピースやリードをくわえて音を出すのでほぼすべての息が楽器に入りますが、フルートは歌口と呼ばれる穴に息を吹き込んで音を出すため、出した息の3分の2程度しか楽器に入っていきません。そのためフルートは優雅なイメージとは裏腹に、他の楽器にも増して肺活量と体力が必要とされる楽器なのです。マウスピース等を介さず息がそのまま音になる、という点では、人間の声に近いともいえます。

作曲家が生きた場所や時代背景、交友関係などを知り、想像を膨らませながらプログラミングをするという高木さん。今回のプログラムもそれを窺わせる作品が並んでいます。評論家でもあったシューマンが世に紹介してその名が

広まったブラームス、そしてブラームスが才能を見出したドヴォルザークの作品に加え、シューマンの創作のミューズであり、自身も作曲をしたピアニストの妻クララの作品が演奏されます。ブラームスとクララは、シューマンの死後も生涯にわたって交流を続け、ドヴォルザークはシューマンとの面識はなかったものの、今回演奏される〈4つのロマンティックな小品〉を聴くとシューマンに大きな影響を受けたことが分かります。シューマンという人物を軸にしながらも、彼の作品自体はないという「不在の存在感」を感じさせる心憎い選曲です。

間には、生きた時代も場所も異なるファリャの〈スペイン舞曲〉が挟まれます。フラメンコ音楽の要素を取り入れたこの曲には、高木さんが得意とする低音が効果的に使われ、アンダルシアの燃え立つような情熱を表現、ロマン派の夢想的な作品との対比が際立ちます。ピアノは、これまで高木さんと数多くのステージを共にしてきた坂野伊都子さん。ピアノと共に様々な表情を見せるフルートの音色に、心奪われるひとときとなることでしょう。



OBSESSION(オブセッション)〜 「最小にて最大のオーケストラ」

第3ステージには、ピアノとドラムスというクラシックでは他に類を見ない組み合わせでクラシックを奏でるデュオ「OBSESSION」が登場します。ピアノの三船優子さんはジュリアード音楽院で研鑽を積み、アメリカでも演奏活動

を展開。現在は日本に拠点を置き、2019年にデビュー30周年を迎えました。正統派クラシックピアニストとしての確固たるキャリアを持つ傍ら、「OBSESSION」などの新たな試みにも挑戦し続けている三船さん。水戸にはご親戚が多くお住まいとのことで、ご本人もこのコンサートを楽しみにしてくれています。堀越彰さんは「山下洋輔ニュートリオ」でデビューしたジャズ畑のアーティストでありながら、邦楽や民俗音楽とのコラボレーションなども繰り広げ、ジャンルの垣根を越えた演奏が魅力のドラマーです。

この2人が出会ったのは2014年。三船さんが出演するコンサートのリハーサルを訪ねた堀越さんが何曲か演奏をリクエストし、その中の1曲、今回は演奏予定のラフマニノフ〈パガニーニの主題による狂詩曲〉を聴いて「これは一緒にやれるかも」と閃いたそうです。クラシックの魅力に取り憑かれていた堀越さんは、その年から三船さんと組み「OBSESSION」(“取り憑かれた”という意味)として活動を開始、今もレパートリーを拡大しています。

いわゆる“クラシックのジャズアレンジ”は多数存在しますが、この2人の演奏は原曲の世界観を壊すことなく楽譜に忠実に、あくまでも“クラシック”であることを信条としています。もちろん、どの曲もこの編成のために書かれた作品ではないので“アレンジ”であることには違いないのですが、作曲家が楽譜に込めた想いに敬意を払い、作品の魅力を最大限に引き出すプレイスタイルは、クラシックファンからも、それ以外の人からも広く人気を得ています。

ドラムスというリズムを刻む楽器というイメージが先行しますが、堀越さんの演奏は打楽器特有の“点”の音だけではなく、奥行きと広がりのある“面”を感じさせる音が印象的。それには、卓越

した感性に加えて、動きにも秘密があるようです。「演奏中の動きは1打1打で終わるのではなく、次の動きにつながる“回転”の動き」と語る堀越さんのしなやかでダイナミックなドラミングを、まるで歌舞伎の見得のようだととえる人もいます。「最小にして最大のオーケストラ」と称する2人の演奏は、会場の響きやお客さんの反応によって毎回変化します。是非“生”の演奏を体験する喜びを味わってください。



ソプラノ&テノール 高らかに愛を歌う

コンサートを締めくくるのは、出会いと別れ、期待や感傷…さまざまな形の愛をつづった歌のステージ。嘉目真木子さんは我が国を代表するプリマドンナの1人として数々のオペラの舞台に立つ人気のソプラノです。今回ソロで歌われるプーランク〈愛の小径〉は芝居「レオカディア」の劇付随音楽の中の1曲。かつて愛する人と歩いた、海へと向かう小径—その想い出を振り返って歌われます。寂しさのなかにも微笑みを湛えたようなシャンソン風のメロディは多くの人の心を掴み、器楽編曲版もしばしば演奏されますが、やはり歌で聴くのが一番。歌曲での細やかな表現にも定評がある嘉目さんの歌に期待が高まります。

澤原行正さんは各地で活躍中の若手テノール。今年の「セイジ・オザワ松本フェスティバル」のオペラ《ラ・ボエーム》ではロドルフォ役に抜擢され、その輝かしく美しい声で喝采をさらいました。澤原さんがソロで歌うのは、レハールのオペレッタ〈微笑みの国〉から“君は我が心のすべて”。当時欧州で流行したオリエンタリズムを反映したこのオペレッタ

では、伯爵令嬢リーザと、中国の外交官スー・チョンの恋模様が描かれます。スー・チョンが高らかに愛を歌いあげるこの歌は、ドイツ語で歌われるテノールのレパートリーの中ではかなり情熱的なもの。澤原さんの美声を堪能できる1曲といえるでしょう。

二重唱はクリスマスの定番〈ホワイ・クリスマス〉、そしてオペラの中で主人公2人が出会い、恋の萌芽を感じる場面を切り取った2曲が選ばれました。全オペラの中で最も有名な旋律と言っても過言ではない《ラ・トラヴィアータ(椿姫)》の“乾杯の歌”は、華やかな夜会のシーンで歌われますが、これは主人公ヴィオレッタが身を焦がすような恋へのほのかな期待と不安を抱き始める最初の場面でもあります。フランス語のオペラ、グノーの《ロメオとジュリエット》“愛らしい天使よ”は、ジュリエットに一目惚れしたロメオが彼女に話しかけ、次第に互いが惹かれあってゆくデュエット。この歌の直後、お互いが敵対する家の者だと分かり、絶望に打ちひしがれるところで第1幕が終わります。声の力で紡がれる様々な愛の形—それを支えるピアノは、歌手からの厚い信頼を得、2020年のこのコンサートでも声楽ステージに出演した高田恵子さん。心震える愛の歌をご堪能ください。

■公演情報

クリスマス・プレゼント・コンサート2023

2023.12.23(土) 16:00

全席指定 一般¥3,500、

U-25(25歳以下)¥1,000

●出演

池辺晋一郎(企画・お話)、茨城キリスト教学園中学校高等学校コーラス部、赤津邦子(指揮)、井上修(ピアノ)、高木綾子(フルート)、坂野伊都子(ピアノ)、OBSESSION[三松優子(ピアノ)、堀越彰(ドラムス)]、嘉目真木子(ソプラノ)、澤原行正(テノール)、高田恵子(ピアノ)

●曲目

オルバーン:〈ミサ曲 第6番〉より

クララ・シューマン:3つのロマンス 作品22

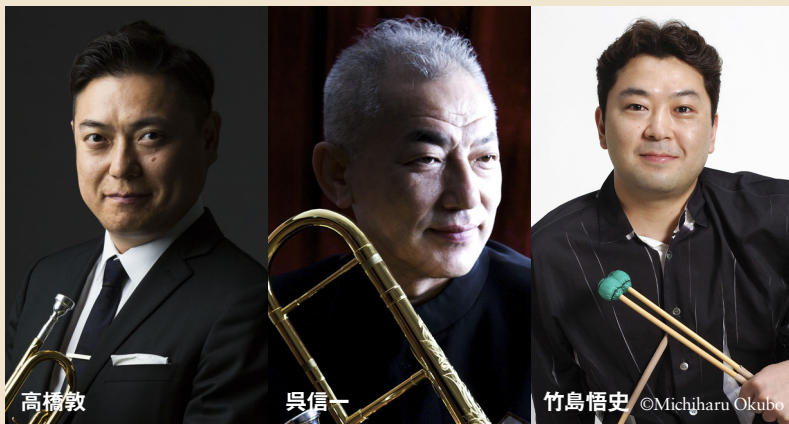
ガーシュウィン:ラブソフィー・イン・ブルー (OBSESSIONバージョン)

バーリン:ホワイ・クリスマス ほか

どこにどんな出会いがあるか——

高橋敦・呉信一・竹島悟史 インタビュー

聞き手：篠田大基



1月26日の「ちょっとお昼にクラシック」は、このコンサートと時期を合わせて開催する「中学生のための音楽鑑賞会」（水戸市内の中学1年生約2,000人が来場予定）と同じ出演者、同じプログラムで開催します。今回は、水戸室内管弦楽団（MCO）に出演を重ね、そしてサイトウ・キネン・オーケストラ（SKO）ブラス・アンサンブルのメンバーでもある、高橋敦さん（トランペット）、呉信一さん（トロンボーン）、竹島悟史さん（打楽器、ピアノ）のトリオでお送りします。コンサートに向けて、高橋さんにzoomでお話をうかがいました。

——MCOやSKOブラス・アンサンブルでおなじみの方々がご出演くださるので楽しみです。今までにこの3人で演奏されたことはありますか？

高橋：今回初めてです。でもトランペット、トロンボーン、ピアノという編成は珍しくなくて、この編成のために作られた曲も実際にあるんですよ。金管楽器は吹き続けることが困難な楽器なので、ピアノが加わることでその負担が軽くなるし、音色の変化や表現の幅も広がるんです。今回は水戸でのコンサートなので、MCOにゆかりのある方とできたらと思って、トランペット、ト

ロンボーン、ピアノという編成を考えたときに、呉さんと竹島君というイメージが浮かんだんです。

——今回の曲目のなかで、バッハの〈トッカータとフーガ ニ短調〉、バーンスタインの〈ウエスト・サイド・ストーリー〉の“マリア”と“トゥナイト”、それから最後のガーシュウインの〈ラブソディ・イン・ブルー〉が、トリオで演奏されると聞きました。パイプオルガンの曲やオーケストラの曲を編曲して演奏するわけですね。

高橋：3人でプログラムを考えていたときに、せっかくだから既存の曲ではなくて、オリジナルをやろうという話になって、SKOブラス・アンサンブルでも僕と竹島君で曲をアレンジしているんですけど、今回も同じように、今回のためのスペシャル・アレンジでいこう！ということになりました。

——楽しみです！編曲はできあがっていますか？

高橋：〈トッカータとフーガ〉と〈ウエスト・サイド・ストーリー〉が僕の担当で、もうできています。〈ラブソディ・イン・ブルー〉は竹島君が今取り組んでくれています。〈トッカータとフーガ〉はパイ

プオルガンの曲ですけど、パイプオルガンっておもに金属のパイプに風を送って音を出すので、金管楽器の響きとよく似ているんです。だからバッハのオルガン曲は金管アンサンブルでもよく演奏されるんですけど、複雑な動きがあって、すごく大変なんです。一方で〈トッカータとフーガ〉にはピアノのアレンジもありますよね。両方の楽器、両方のアレンジの特性をミックスさせたら面白いかなと考えました。〈ウエスト・サイド・ストーリー〉は、ピアノを伴奏にして、トランペットとトロンボーンがデュエットするようにアレンジしてみました。

——バーンスタインやガーシュウインなど、アメリカの音楽が多いですね。

高橋：たまたまですね。でも金管楽器のいろいろな特色を聴かせようと思うと、クラシックだけに頼れないという面はあります。どうしても近代の曲やミュージカルやジャズのナンバーが多くなりやすいんです。トランペットのソロで有名な曲を、と考えたのが、やっぱりアメリカの作曲家のアンダーソンの〈トランペット吹きの子守唄〉でしたし。

今回はトリオでの演奏に加えて3人それぞれのソロの演奏も予定しています。高橋さんが〈トランペット吹きの子守唄〉、呉さんが〈誰も寝てはならぬ〉。竹島さんは検討中とのこと。呉さんと竹島さんが10月のMCO第112回定期演奏会で水戸にいらっしゃったときに、お二人にも話をお聞きました。

竹島：〈誰も寝てはならぬ〉はマリimbaで伴奏しようと思っているので、じゃあ自分のソロはどの楽器にしようか、まだ考えているところです。

呉:〈誰も寝てはならぬ〉を竹島さんがマリンパで伴奏してくれること、本当に嬉しく、またすごく楽しみにしています。どのようなアレンジになって曲想を作り上げるか、今からゾクゾクしてきます。ピアノ伴奏よりマリンパ伴奏の方が僕のイメージのサウンドになると思っています。

——呉さんはなぜ〈誰も寝てはならぬ〉を?

呉:僕の十八番だと自分で思っています(笑)。昔から歌が好きで、この曲の歌詞の意味、言葉の発音の仕方などを知ることによって音の出し方も変わるでしょ?まあ、今回はちょっとパヴァロッティ風になるかも?(大笑) ア〜♪(歌う)

——コンサートのイメージが膨らみますね。準備は着々と?

竹島:高橋君が編曲したトリオの譜面は送られてきていて、僕の方でも少し調整するつもりです。SKOプラス・アンサンブルでも、高橋君のアイデアで書かれた譜面に僕がさらに手を加えて演奏するんです。僕がアレンジする曲も高橋君に見てもらって、息継ぎとか楽器の特性上できるかどうかを確認してもらう。だから本当に共作ですね。その上できれいな譜面を作っているようにしています。

呉:今まで譜面のトラブルなかったですよ。両者の思いが詰まった素晴らしいアレンジです。毎回毎回非常に楽しみです。

竹島:演奏するお互いのことが分かっているからこそ書ける音符って、あるんですよね。外部のアレンジャーに発注して編曲してもらって選択肢もありますが、そうして出てくる音は、僕らがたとえば呉さんのために書く音とは絶対に違います。呉さんならたぶんここで息を吸うとか、あそこで楽器の持ち替えにはこのくらいの時間がかかるとか、そこまで分かっているから。

呉:プレーヤーの顔を思い出しながら書いてるところが多分にあると思うね。編曲を楽しんでるよね。

竹島:そういう意味では、今度の〈ラプソディ・イン・ブルー〉でも、何か「ならでは感」を出せたらいいなと思っています。

——〈ラプソディ・イン・ブルー〉のピアノ・ソロは竹島さんが弾くわけですね。

竹島:ピアノを前面に出すつもりはなくて、ピアノは伴奏主体にソロも少しあるというくらいにしようと思っています。トリオなので、ピアノ・コンチェルトのようにするつもりはまったくないですね。

最後に、コンサートに来る中学生やお客様へのメッセージをお願いします。

高橋:今回のコンサートを通じて金管楽器の魅力を楽しんでもらえたらと思います。学校には吹奏楽部があるし、金管楽器の音は身近なところでも聴けるし、親しみやすい楽器だと思うんですよ。コンサートのなかではトランペットやトロンボーンの話もできたらいいなと思っています。それから、竹島君がピアノを弾いたり、いろんな打楽器を演奏するのにも注目してもらえたらと思います。固定観念にとらわれずに、いろんなことにチャレンジして、いろんなことができるようになることの素晴らしい、感じてもらえたらと思います。

呉:僕、中学の時は美術部だったんですよ。高校生になって初めてトロンボーンと出会ったのです。その高校は吹奏楽部が有名で中学からの吹奏楽経験者が多く入部希望で来てました。私はトランペットを吹きたいと言いましたが、すでにトランペットを上手く演奏出来る生徒がいて断念!それでオーボエを吹きたいと言いました、当時オーボエ、ファゴットなどの楽器を特殊楽器と言いつつにはありませんでした。部室の隅っ

こにある楽器を指差しその楽器をしないと言われました。それがトロンボーンでした。僕はトロンボーンを選んだのではなく、先輩に決められた楽器なのです。でもトロンボーンが大好きになり、出会って1週間ぐらいの時にトロンボーンと一緒に風呂に入ったのです。楽器を洗ってあげたんだ(爆笑)。

竹島:どこにどんな出会いがあるか、分からないですからね。音楽をやるのに、たとえばレッスンを嫌になったり、練習が面倒くさくなったりするのは、やらなきゃいけないって思っちゃうからですよ。でも、音楽って自由なもので、やりたくなかったらやらなきゃいいし、一方で楽しむためには頑張らなきゃいけないこともある。音楽を演奏したり、聴いたりしているときに、苦痛になっていたら、とても良くないと思う。だから、折角コンサートに来てくれたのに、寝ちゃだめだ、咳しちゃだめだって、ルールに縛られて固まっているよりは、リラックスして、寝てくれても全然構わないと思う。こちらは気持ち良いから寝てるんだって思うから。今回、いろいろな曲、いろいろな楽器が入っているプログラムなので、曲だったり、楽器だったり、何か出会いがあるかもしれないので、そういうところを楽しみに来ていただけたら嬉しいです。

(2023年10月15日、zoomにて
10月21日、水戸にて)

■公演情報

ちよっとお昼にクラシック

高橋敦(トランペット)・呉信一(トロンボーン)・
竹島悟史(打楽器&ピアノ)

2024.1.26(金)13:30

全席指定 一般¥1,500

(カップオン サザンスペシャルブレンド1枚付き)

●曲目

J.S.バッハ: トッカータとフーガ 二短調

BWV565

アンダーソン: トランペット吹きの子守唄

ブッチーニ: 歌劇〈トゥーランドット〉より

“誰も寝てはならぬ”

バーンスタイン: (ウエスト・サイド・ストーリー)

より “マリア” “トゥナイト”

ガーシュウィン: ラプソディ・イン・ブルー ほか

INFORMATION

※以下は11月2日現在の情報です。公演等に関する最新情報は当館ウェブサイトにてご確認ください。

チケット・インフォメーション

《12.16(土)発売分》

■ちょっとお昼にクラシック

宮田大(チェロ)&山中惇史(ピアノ)
3.23(土) 13:30

12月・1月の主な音楽イベント

コンサートホールATM

◆クリスチャン・ツィメルマン ピアノ・リサイタル

12.6(水) 19:00

料金[全席指定]A席¥10,000/B席¥8,000

◆水戸の街に響け! 300人の《第九》2023 入場無料

会場:広場 ※雨天時はコンサートホールATM

12.17(日) ①12:00/②13:30

◆クリスマス・プレゼント・コンサート2023

12.23(土) 16:00

料金[全席指定]一般¥3,500/U-25(25歳以下)¥1,000

◆水戸室内管弦楽団メンバーとセミナー受講者の合同コンサート MCOセミナー・ウィンズ2024

1.21(日) 14:00

料金[全席自由]¥1,000

◆ちょっとお昼にクラシック ブラス・プラス・パーカス

高橋 敦(トランペット)・呉 信一(トロンボーン)・

竹島悟史(打楽器&ピアノ)

1.26(金) 13:30

料金[全席指定]¥1,500(カップオン スペシャルブレンド1枚付き)

エントランスホール

◆パイプオルガン・プロムナード・コンサート

(入場無料/事前予約不要)

□12.3(日) 11:00~11:30 金子雄太

□12.24(日) 11:00~11:45 ★クリスマス・スペシャル

山田由希子、阪田宏彰(チェロ)

□1.8(月・祝) 13:00~13:45 ★新春スペシャル 大木麻理

□1.20(土) 12:00~12:30/13:30~14:00 出演者調整中

2023年11月7日発行(第260号)

編集:水戸芸術館音楽部門 | 中村晃、関根哲也、高巢真樹、篠田大基、鴻巣俊博、高木春佳、木村綾花

発行:(公財)水戸市芸術振興財団 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8 Tel.029-227-8118(音楽部門)

Tel.029-231-8000(チケット予約センター 9:30~18:00・月曜休館) <https://www.arttowermito.or.jp/>

デザイン:K5 ART DESIGN OFFICE. 印刷製本:山三印刷株式会社

■編集後記

最近、台湾旅行をした友達から、お土産に烏龍茶を頂きました。普段、烏龍茶は飲まないのですがとても美味しいことに気付きました。この冬は、本場のものや旬のものなど、自分の嗜好の変化を楽しみながら様々な味に出会う季節にしたいです。(綾)

2023年の春が来て、しまわなくちゃと思い続けてはや数か月、我が家の石油ストーブはリビングで夏を越し、そのままあたらしい冬を迎えました。エアコンは予約もできるし良いのですが、炎で暖を取るほうが心温まる感じが好きです。(鴻)

水戸室内管弦楽団の管楽器メンバーとセミナー受講者によるコンサート「MCOセミナー・ウィンズ」を1月21日に開催します。今回の講師と受講者は木管・金管ほぼ同数で、全員で合奏すると小さな吹奏楽団のようでした。コンサートをお楽しみに!(篠)

オペラを音だけで聴くのが好きな私にとって、最近の注目はラル氏の指揮録音。新譜はジークフリート。その音を浴びていると、アーサー・ラッカムの挿絵を最新技術でアニメ化したかのような映像が見えてくる。ノートウング最高!(て)

4年ぶりに広場で300人の《第九》が開催されます! 水戸芸術館に来てから3年。一度も広場での第九を聴けずにいました。今年は開催日が例年より一週遅いので寒さが厳しいと思いますが、どうか快晴で歌えますように。(春)

先日のプロムナードコンサート終演後、パイプオルガンの生演奏を初めて聴いたという高校生が声をかけてくださった。「一生思い出に残るような演奏でした」と感想を伝えてくれて、こちらも清々しい気持ちに。ご来場に感謝です(樹)

開館時から印刷物のデザインの多くを手がけて頂いたデザイナーの増山正日さんが現役を退かれることになった。公演ちらしのデザインでは、その演奏を聴き、内容を熟知して、品格があり、余白の美しい、それ自体がアートと言えるものを残してください。ありがとうございました。(中)

Lucky FM 茨城放送

「水戸芸術館 presents みんなのクラシック」

毎週日曜 7:30~8:00

パーソナリティ:石井哲也アナウンサー

出演:音楽部門学芸員(月替わり)

学芸員がおすすめの曲をご紹介して、クラシックの魅力をお届けする番組です。

▼Lucky FM ウェブサイト

<https://lucky-ibaraki.com/>

▼radiko(ラジオ)でもお聴

きいただけます

<https://radiko.jp/>



演劇・美術のイチョシ企画!

ACM劇場

◆新・未来サポート事業 ADACHI HOUSEラボ

『ミュージカル 水戸黄門』

12.21(木) 18:00~(プレビュー公演)

22(金) 14:00~

23(土) 13:00~、18:00~

24(日) 13:00~

料金[全席指定]S席¥5,000/A席

¥3,000/U-25(25歳以下)¥2,500

／プレビュー公演¥2,500

構成・脚本:井上 桂 構成・演出:橋本昭博

出演:安達勇人、加藤良輔、神田真紅、高根正樹、小林祐介、小林鈴勘、

はなわちえ ほか



前回公演舞台より 撮影:刑部アツシ(おさかべ写真館)

現代美術ギャラリー

◆「今村源 遅れるものの行方」展

11.3(金・祝)~1.28(日)

[休館日]月曜日(祝日の場合は翌火曜日)

12.9(土)、10(日)、年末年始

[開場時間]10:00~18:00(入場は17:30まで)

[入場料]一般¥900/団体(20名以上)¥700

※高校生以下・70歳以上、障害者手帳などをお持ちの方

と付き添いの方1名は無料



〈1997-7〉、宇都宮美術館 栃木

★新聞にて音楽部門学芸員によるコラムを連載中!

○茨城新聞「ATM便り」毎月1回(不定期)

○東京新聞「水戸芸術館発 クラシックへの旅」毎月第3日曜

お酒を飲む機会が増える年末年始、美味しく楽しく飲みましょう。

